関西自然保護機構会誌 25（1）：1－2，2003

巻　頭　言

# 2枚の写真

京都大学農学研究科　神崎　護

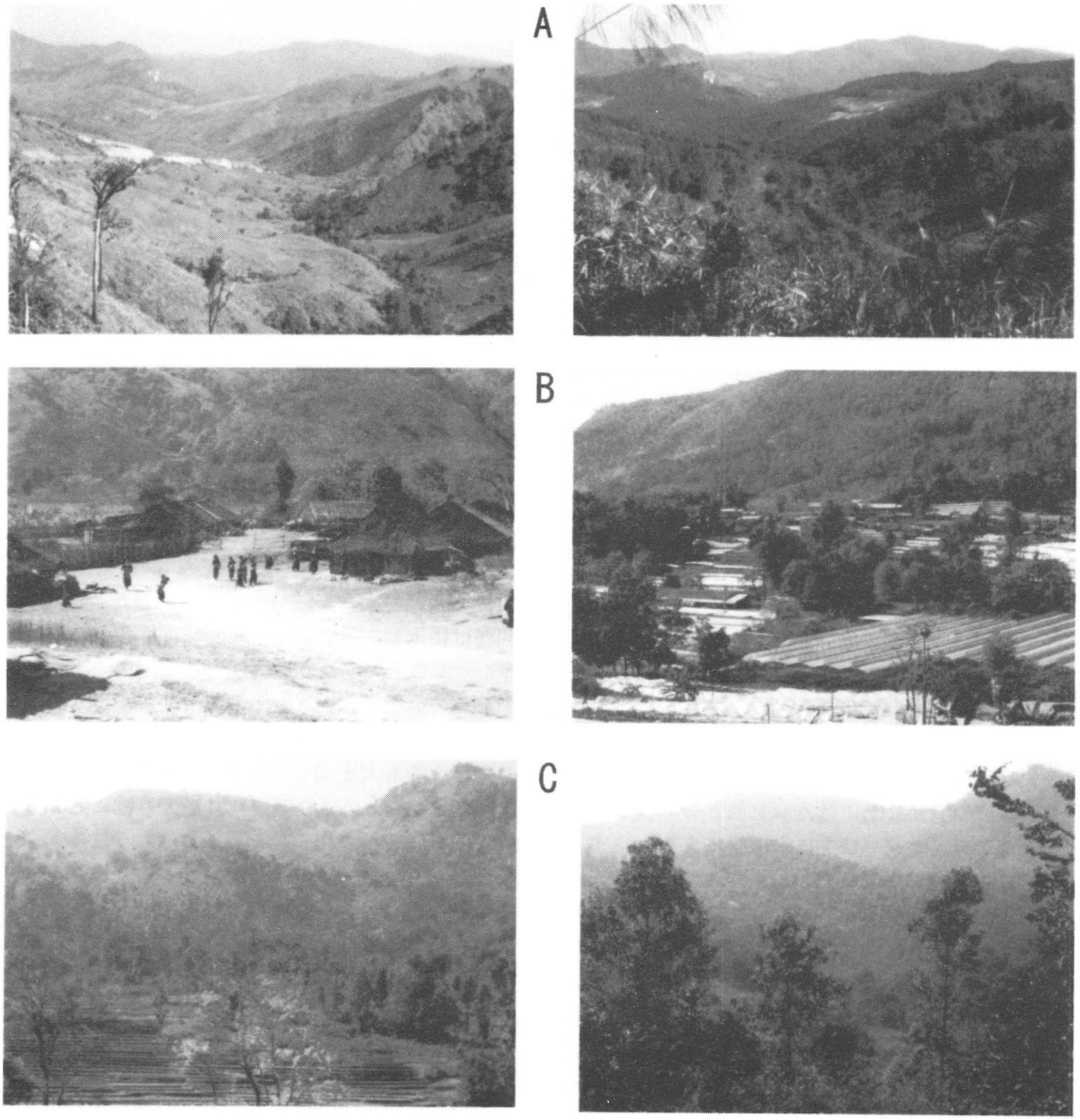
吉良先生から28枚の写真を頂いた。タイのドイインタノン国立公園で，1976年1月4日に撮影されたものだ。山頂の空軍レーダサイトに向かうハイウェイが開通した直後，吉良先生ご夫妻とタイの分類学の重鎮テム・スミッティナンド先生が，当地を訪問された折に，吉良先生が撮られた写真である。私は，2001年2月に，同じ場所で写真を撮るため，調査の合間の1日を使って，ハイウェイ沿いに車を走らせた。残念ながら撮影地点が確定できなかったものも多かったのだが，ここに掲載した3組の写真には，ドイインタノンの四半世紀の植生の変遷と，公園内の山岳少数民族の生活の変化が見事に示されていた。A）の2枚の写真からは，標高1,300 mから1,600 mにかけての焼畑跡地が，ケシアマツの植林によって見事に森林化しているのがわかる。この植林はタイの王室森林局が，1980年前後に精力的に行ったものである。B）の写真は，焼畑を放棄し定住化政策に従った，モン（Hmong）族の集落の変化である。この国立公園にはカレン族とモン族が住み着いていて，カレンは主に水田耕作をモンは主に焼畑で生計をたてていた。このうち，モンの人々は，焼畑の代替生業として，王室の強力なバックアップのもと，花卉栽培やイチゴ，プラムなどの果実生産に特化した農業へ移行してきた。2001年の写真に写っているのは電照栽培用のビニールハウス群である。一方，C）の2枚の写真では，変化が良くわからない。カレンの人々の耕す棚田とその後ろの里山の25年間の変化は緩やかで，里山の一部にみられた伐開地が，現在では木に覆われているのが目を凝らすとわかる程度である。

ここ20年間の変化は，バンコクやチェンマイなどの大都市で目を見張るものがある。下水路を覆う蓋が壊れているので，雨で増水したときに下水に落ちないようにとカセサート大学の先生に注意されたのは昔の話。町は随分と清潔になり，24時間営業のコンビニとATMが街中に溢れ，ある意味では日本よりも便利になった。山の中の変化も著しい。タイの天然林は切りつくされ，1989年からは伐採禁止令が発令され，植林地以外での伐採はご法度である。ドイインタノン国立公園では，公園の外周部を除いて，焼畑はほぼ抑止され，写真でみたように草原化した焼畑跡地が森林へと変貌している。しかし，タイ全体を見る限り，スローダウンしたとはいえ今も森林面積は減少し続けている。

社会問題の中身も随分と変化してきた。貧困の問題は後退し，環境問題が新聞をにぎわすことが多い。川の上流部の高地農民である山岳少数民族，中流部の低地農民，下流部の都市住民の間の，水資源と水質をめぐる複雑な論争も起きている。人々の環境意識も大変高く，エコツアーはもちろん，アグリツアー，つまり農業体験を売り物にしたタイ人向けの旅行も出始めた。これはもう日本も顔負けの状況である。

そんな中で，タイの森林研究に求められているものも，少し変貌してきたように思われる。一時は人工造林の研究が重視されてきたが，いまや日本と同じように，二次林の再評価，里山の復活，そして残された自然林での詳細な研究にも関心が向けられるようになってきた。2枚の写真に触発されて，私もドイインタノンの二次植生の動態に惹かれるようになり，今年の夏から共同研究者とともに調査を行うことになった。この調査で，ここに示した2枚の写真の間に起きた変化を，生態学的なデータとして裏打ちし，さらに次の世代の

研究者につなげられるような森林モニタリングサイトを設置できないかと考えている。研究インフラとして使いやすい調査区の設置と維持が，私のライフワークのひとつとなっている。そんな仕組みがうまく働いていくかどうかは，やはり四半世紀くらいの時間が経過したときに試されるのだろう。




**写真説明**：左は吉良竜夫先生が1976年1月に撮影。右は著者が2001年2月に撮影. A）標高1,300 mから1,600 mにかけて広がる焼畑跡地. 25年間で植林によって森林が回復. B）標高1,300 mのモン族の村Ban Khun Klang. 電照設備の整ったビニールハウスによるキクなどの花卉栽培が普及. C）標高1,100 mのカレン族の村Ban Mae Klong Luangの水田と背後の里山. 里山の伐開地が25年の間にすっかり樹木に覆われている.